

FAMILY

Feature 秋季大会 2023 in Shizuoka 「2030年の日本の未来を共に創る」



地球の
仲間たち

Red Crowned Crane

タンチョウの湿原から、メッセージが届いています

▶ 裏表紙

VOL. **412**

Winter 2024

秋季大会 2023 in Shizuoka | 2023.11.08 Wed. - 11.09 Thu.

2030年の日本の未来を共に創る

～ 地域と共にありたい社会を実現するために ～

2023年度ファミリー会秋季大会の舞台は、初開催となる静岡県。富士山に象徴される風光明媚な自然、豊かな歴史・文化、製造業を中心とした多彩な産業など、幅広い魅力を持つ静岡での開催を通じて、多くの会員様が語り合い、課題解決に向けたヒントを持ち帰っていただく機会となりました。

Contents 会報Family VOL.412

- 2 秋季大会 2023 in Shizuoka
- 5 秋季大会特別講演演録
「家康が変えた日本」
- 11 Futures' Literacy
人類の夢を乗せて膨らみ続ける
宇宙ビジネスのビッグバン前夜を探訪
- 16 Family's Information
- 17 Family's Event Picks
 - [Fujitsu Kozuchi (code name)
- Fujitsu AI Platform] のご紹介
 - 集合型ワークショップ
「情報交換会」&交流イベント
 - 人材育成や地域コミュニティについて
考え、一歩踏み出すきっかけに

富士通を含めた会員企業同士が、共に考え、共に未来を目指す機会に

新型コロナウイルス感染症が5類に引き下げとなり、ようやくリアルでの人の集まりも可能になりました。とはいえ、コロナ以前の生活に戻ったわけではなく、企業が直面する課題はより多様化・複雑化し、個々の企業だけで解決するのは困難な時代を迎えています。

FUJITSUファミリー会の目的は、会員企業と富士通が共に考え、研究や討議、実践を通じて、お互いの利益増進を目指すことにあります。さらにその先には、会員企業や富士通が拠点を置く地域社会、ひいては日本社会の成長・発展に寄与することを目指しています。

こうしたファミリー会の意義を再確認すべく、今年の大会のテーマは「2030年の日本の未来を共に創る」、そしてサブタイトルは「地域と共にありたい社会を実現するために」としました。

来たる2030年に向けて、会員相互の交流を通して、共に取り組むべき課題解決のヒントとなる有益な情報を持ち帰っていただけるよう、多彩なプログラムを用意しました。参加者が得た知見や気づきを、誌面を通じて皆様にも共有いただければ幸いです。

会場：静岡県コンベンションアーツセンター「グランシップ」

開会挨拶



FUJITSUファミリー会 会長
第一生命情報システム
株式会社
代表取締役社長
佐藤 智

来賓挨拶



静岡県 副知事
出野 勉 氏

基調講演



富士通株式会社
執行役員 SEVP
グローバルビジネス
ソリューション
ビジネスグループ長
高橋 美波

デモンストレーション



富士通株式会社
グローバルビジネス
ソリューション
BG シニアマネージャー
平谷 真智子 /
ソーシャルソリューション
事業本部
シニアマネージャー
秋野 陽太郎

富士通挨拶



富士通株式会社
代表取締役社長 CEO
時田 隆仁

総合司会



会報担当理事
大林 孝至

サステナブルな社会の実現に向けて

基調講演の冒頭では、富士通が今後10年間の重要テーマと捉えているサステナビリティ・トランスフォーメーション(以下SX)についての解説がありました。SXとは、地球規模の気候変動や災害・紛争によるサプライチェーンの分断など、複雑化する社会課題をテクノロジーによるイノベーションを通じて解決し、社会をより持続可能なものにしていくこと。一方で、グローバルリーダーの中では「サステナビリティは新たなビジネス機会」と捉える声も多く、SXへの取り組みは、日本企業がグローバル市場での価値を高めていくチャンスでもあります。

こうした認識のもと、2021年10月に立ち上げられたのが、サステナブルな社会の実現を目指す富士通の新事業ブランド「Fujitsu Uvance(ユーバンス)」です。SXで取り組む課題は、1社の力だけで解決できないものが多く、クロスインダストリーでの取り組みが欠かせません。富士通はFujitsu Uvanceを通じて、自ら培ってきた技術やノウハウとお客様の知見を統合し、社会課題解決につながるサービスソリューションに育てていきます。その具体例として、

「デジタルリハーサルによるCO₂排出削減」「ブロックチェーンを駆使したトレーサビリティ確保による責任あるサプライチェーンの実現」「気象データと連動した需要予測によるフードロス削減」など、様々な事例を紹介。そのうち代表的な2事例についてデモが行われ、来場者から感嘆の声が上がっていました。

最後に、Fujitsu Uvanceは、ユニバーサル(あらゆるもの)とアドバンス(前進)を組み合わせた造語で、富士通がお客様と共に社会課題を解決し、共に前へ進んでいこうとの想いを込めたブランドであることが説明され、会員企業の皆様と一緒に、社会課題の解決に向けた大きな渦を作っていきたいとのメッセージで締め括られました。



Fujitsu Uvanceを通じて社会課題解決に取り組むうえで、「Planet(地球環境問題の解決)」「Prosperity: デジタル社会の発展」「People:人々のウェルビーイングの向上」を重点テーマとしている。

パネルディスカッション

Panelist



静岡県庁
デジタル戦略局 参事
杉本 直也 氏

Panelist



国立大学法人静岡大学
サステナビリティセンター
センター長
堂園 俊彦 氏

Panelist



富士通株式会社
Japanリージョン
ソリューショントランス
フォーメーション本部長
古濱 淑子

Moderator



静岡放送株式会社
報道制作局 報道部
専任部長
岩崎 大輔 氏

地域と共に創り上げる未来

パネルディスカッションでは、報道界で地域防災を専門に活躍されてきた岩崎氏の司会のもと、静岡を舞台にした産官学それぞれの取り組みが紹介されました。

まず、県のデジタル戦略を牽引する杉本氏から、ビッグデータ利活用の先進事例として、3次元の点群データを使った「バーチャル静岡構想」が紹介されました。上空のセスナや道路を走る車などから取得した膨大なデータを集約し、県全体をバーチャル空間に再現したものです。このバーチャル静岡をオープンデータとして公開することで、防災対策や次世代交通など幅広い分野で成果が出始めています。

続けて静岡大学の堂園氏から、持続可能な社会づくりに向けた活動が紹介されました。学内におけるSDGs活動の情報を整理・発信する「サステナビリティセンター」、産官学連携による「カーボンニュートラルワーキンググループ」、社会課題の解決に貢献できる人材育成を目指す新学部「グローバル共創科学部」、大学の知と社会をつなぐ窓口となる「イノベーション社会推進連携機構」などにより、地域社会とのさらなる連携強化が期待されます。



そして富士通の古濱から、全国13地域に展開するDXプロデューサーの取り組みについて紹介。北海道神恵内村や高知県黒潮町などを例に、富士通のDX人材が地域に溶け込みながら課題解決に取り組んでいる姿が報告されました。また、脱炭素に向けた国民運動を牽引すべく、富士通発祥の地である川崎での環境活動を積極的に発信していることも紹介されました。

最後に岩崎氏より、メディアという立場から、地域の課題や、その解決に向けた行政、大学、企業の取り組みを積極的に発信していくことで、より良い地域社会を作っていきたいとの決意が語られ、締め括られました。

開催支部挨拶



東海支部 支部長
株式会社静岡新聞社・
静岡放送株式会社
執行役員 経営戦略局長
風間 隆男

次回開催支部挨拶



北海道支部 支部長
株式会社北海道新聞社
執行役員 制作局長
村上 孝志

風間氏より大会旗の交換を受けた村上氏は、ファミリー会60周年という節目に開催地となることへの感慨を語るとともに、広い北海道の魅力を存分に楽しめるよう、余裕ある日程での参加を呼びかけました。

特別講演 | 井沢流でひも解く家康像から、日本の来し方を知り、未来を展望する



作家、歴史研究家

井沢 元彦 氏

Profile

1954年2月1日名古屋市生まれ。早稲田大学法学部卒。TBSに入社し報道記者として活動。第26回江戸川乱歩賞を受賞し31歳で退社、歴史ノンフィクションに独自の境地を開拓した。主な著書に、『逆説の日本史1～27』『日本史真髓』(小学館刊)、『英傑の日本史』(角川書店刊)がある。

YouTubeでは、『井沢元彦の逆説チャンネル』で常に歴史問題を発信しており、ネットニュース番組『ニュース・オプエド』のキャスターも務めている。



◀井沢元彦の
逆説チャンネル

家康が変えた日本

人質として幼少期を過ごし、幾多の困難に瀕しながらも天下人にまで昇りつめた徳川家康。その人物像に迫りながら、家康がその後の日本をどう変えたのか、最新の知見、現代史にも触れながら解き明かします。

歴史家ならではの俯瞰的な視点で捉えた家康像

ただいま、私のことを「歴史研究家」と紹介いただきましたが、最近では「研究」を取って「歴史家」、英語にすると「ヒストリアン」と名乗っています。

よく「歴史家と歴史学者はどう違うのか?」という質問を受けます。歴史学者は、それぞれ自身の専門分野を持っていますが、例えば「鎌倉時代の専門家」といった大きな括りではなく、鎌倉時代の政治、あるいは経済、あるいは文化の専門家というように、非常に細分化されています。決して悪口を言うつもりはありませんが、専門分野だけに集中して研究するため、どうしても広い視野で物事を捉えるのが難しくなりがちです。これに対して歴史家は、歴史的な事件や人物について、日本史全体から見る、あるいは世界史も含めて見るなど、より俯瞰的な視点で捉えることがで

きるのです。

そうした歴史家ならではの視点で徳川家康という偉人を捉えたとき、これまであまり気付かれていなかったけれど、その後の日本に非常に大きな影響を与えていたことがあります。それは「日本の女性を弱くした」ということです。

日本史を通して見ればわかる
実は強かった日本の女性

昨今、国際社会からも批判されているように、残念ながら日本は先進国の中でも女性の社会進出が遅れています。皆さんは「昔からそうだった」と思われているかもしれませんが、実際に歴史を振り返ってみれば、決してそうではなかったことがわかります。

中国の歴史書に初めて登場する日本人は邪馬台国の女王・卑弥呼です。天皇家も天照大神という女神の子孫とされていますし、聖徳太子の叔母にあたる推古天皇をはじめ、

古代には女帝の即位も少なくありませんでした。ちなみに、中国で初めて女帝が誕生したのは唐の時代の則天武后（そくてんぶこう）、武則天で推古天皇よりもずっと後の時代のこと。しかも、長い中国史上で唯一の例です。その意味では、日本は東アジアでも飛びぬけて女性が強い国だったと言えるでしょう。

家康が活躍した戦国時代はどうかというと、やはり女性が強かったことが資料からも証明されています。当時、ポルトガルから来日していた宣教師、ルイス・フロイスがこんな記録を残しています。「日本では夫婦各々が財産を所有し、時には妻が夫に貸し付ける」「日本ではしばしば妻の方から夫を離縁する」「日本の妻や娘は俗世から隔離されることなく、自由に行きたい所へ行く」など、西洋に比べて非常に強い女性の姿に驚いています。

ところが、戦国時代が終わって家康が江戸幕府を開くと、この状況が一変します。時代劇などで見られるように、夫は一筆書けば妻を離縁できるのに、女性はいかに夫が横暴でも耐えるしかなく、駆け込み寺くらいしか逃げ場はありません。少し時代が下っただけで、女性の立場がこうも変わってしまった理由はどこにあるのでしょうか。私はズバリ言って、家康が恐妻家だったためだと考えています。

大河ドラマとは異なる、 家康と正妻・瀬名との関係

今回の大河ドラマでは、家康と正妻である瀬名さんとの恋物語が描かれていました。私も小説を書いていたので、「これまでと違うものを書きたい」という脚本家の気持ちはよくわかります。ドラマや小説はフィクションですから、おもしろければ「嘘」が許される面もあります。とはいえ、あれほど2人が仲睦まじかったとは考えづらいというのが

本音です。

家康は、本来なら三河の国の殿様なのに、大国・駿河を治める今川義元の人質となり、幼少期から顎で使われ続けて育ちました。成長した後、今川家の重臣の娘であった瀬名さんを正妻に迎えたわけですが、義元の姪にあたる瀬名さんからすれば「わざわざ嫁に来てあげたのよ」くらいの気持ちがあったかもしれません。

ところが、義元が織田信長に敗れると、家康は即座に信長と同盟を結び、義元の「元」の字をもらった「元康」から改名しているわけですから、いかに今川家を恨んでいたかが想像できます。その結果、今川家に残されていた瀬名さんは「裏切り者の嫁」として幼子もろとも処刑されかけ、両親は自害に追い込まれました。たまたま助かったとはいえ、「自殺しにしようとした」と家康を恨んだのではないのでしょうか。

そう考えると、その後、家康の領土が広がって本拠を岡崎から浜松に移した際、岡崎に瀬名さんを置き去りにしたのも納得がいきます。家康にすれば、煙たい存在を遠ざけたわけですが、その結果、瀬名さんは岡崎に侵入した敵方のスパイと共謀。そうした内紛が信長にも伝わったことで、悲劇的な結末を迎えたわけです。

よほど懲りたのか、家康はその後、豊臣秀吉の妹を強引に押し付けられるまで、正妻を持つともしませんでした。これは後継を定めることが重要な当時の武家の当主としては、あり得ないことです。

家康が懲りたのは、瀬名さんだけではありません。一度は天下に君臨した豊臣家が、関ヶ原の合戦から大坂の陣を経て跡形もなく滅んでしまったのは、秀頼の母親として権勢をふるった淀殿の責任。家康の眼にはそう映ったはずですが、だからこそ、後に江戸幕府を開いた際に、江戸城内に

男子禁制の「大奥」を設けたのです。

海外には中東のハーレムや中国の後宮などの例がありますが、女性が強かった日本では、家康以前には見られなかったものです。ただし、海外とは少し性格が異なり、女性を独り占めするのではなく、女性を政治に関わらせないことが目的であり、そこから女性の政治力が弱くなっていったと考えられます。

戦国時代を終わらせたモラルが 男尊女卑の社会を生んだ

家康が女性を弱くしたもう1つの理由も、やはり先達からの教訓によるものです。天下人に近づいた織田信長が、自ら引き立てた明智光秀に殺され、その光秀を討った秀吉は、大恩ある織田家から天下を奪いました。そんな弱肉強食の繰り返しを目の当たりにしてきた家康は、「なんてモラルのない国だろう」と嘆いたことでしょう。これほど恩知らずばかりが出てくるようでは、ようやくつかんだ徳川家の天下も決して安泰ではない。そうした危機感のもと、モラルある社会を確立するために取り入れたのが、中国の儒教でした。

儒教というのは、ごく簡単に言えば、目上の人を敬うことを重んじる思想ですから、配下が主君に反乱を企てるような下剋上の時代を終わらせるには最適な思想だと考えたのででしょう。そこで家康は儒学者をブレーンに登用し、武家の子弟に幼少期から学ばせるなど、その普及に努めました。ただし、儒教は中国の思想だけに、男尊女卑も徹底していました。そこも含めて日本中に浸透してしまったため、言わば副作用として、女性が弱い社会に変わってしまったのです。

ここで見逃せないのが、儒教というモラルで戦国時代を

終わらせることができたのも、秀吉の失政、つまり朝鮮出兵の失敗があったおかげだということです。ただし、それは秀吉が愚かだったという意味ではありません。よく言われるような「独裁者の暴走」でもなければ、「最初の子供を亡くした悲しみを紛らわすため」といった個人的な理由でもありません。

決して海外侵略を肯定するわけではありませんが、国内を統一した支配者が、次に国外へと兵を向けるのは、世界的に見れば常識です。アレクサンドロス大王もチンギスハーンもナポレオンも、皆同じことをしました。なぜなら、兵士たちが納得しないからです。「日本は平和になって、もう君たちの仕事はないから全員解雇」と言ったら、それこそ大反乱が起こります。これにより、秀吉は朝鮮に兵を送り、それが悲惨な結果に終わったことで、兵士たちの間にも「もう戦はこりごり、今の身分のままでいいから穏やかに暮らしたい」という機運が広がりました。そうした下地がなければ、いくら家康が頑張っても、儒教も広がらず、徳川を頂点とした身分社会は確立しなかったことでしょう。

自らを天皇家と並ぶ「神」に 家康最後の挑戦

戦争のない安定した社会をつくるための家康の取り組みはほかにもあります。中でも特筆すべきなのが自己神格化。徳川家の権威を、日本を治める神の一族・天皇家を超えるまでに高めるべく、自らを神にしようとしたのです。

実は、これは先輩である織田信長もやろうとしたことですが、その途上で討たれてしまいました。家康は信長の近くで、自分の政権を永続させるには自己神格化が必要だということを学んだのでしょう。日本は天皇が治める国ですが、なぜ天皇が偉いのかと言うと、天照大神という神様の

子孫だからです。論理的に考えれば、その上に行くためには、自分が神になるしかないわけです。

そこで家康は、自らの死後、「東照大権現(とうしょうだいごんげん)」という名の神様に祀り上げます。権現とは、人間の姿になって地上に降りてくる神様のことで、地上で民を救い、人間としての寿命を終えると、また天界に帰って行きます。家康のブレーンだった天海僧正は、「家康は乱世を終わらせるために地上に表れた権現様だった」との理論付けを行い、家康の死後、日光東照宮に祀ります。現在も多くの人が参拝に訪れているように、家康は神になることに成功したわけです。

「神である家康の子孫・徳川家は天皇家と同等」という家康の意図は、ほかにも随所に表れています。例えば、「東照=アズマテラス」という名前が、天皇家の先祖である天照大神との対比であることは明らかです。また、江戸と京都を結ぶ東海道を整備し、五十三次と呼ばれる宿場を設けましたが、この数字は華嚴経に由来します。つまり、この世からあの世に行くまでの53の宿ということで、幕府のある江戸を現世、天皇家の住む京都を過去と位置づけ、言わば天皇家を過去に封じ込めようとしたわけです。

これだけ自身の神格化を徹底したことで、徳川家はその後約300年にわたり戦争のない社会を実現します。これは家康の大きな功績と言えるでしょう。

歴史を流れて捉えるための 新たな視点を養ってほしい

今回、述べたことは日本史の教科書には載っていませんし、昔は歴史学者の先生方から相手にされなかったこともあり。冒頭で述べたように、専門家というものは自身の専門分野しか見ようとしないので、教科書も時代ごと、分野ごとの記述になりがちで、歴史の流れというものがかなか頭に入ってきません。

私は『逆説の日本史』というシリーズを27巻以上も書き続けており、最近では入門編に最適なコミック版も出ています。これらをお読みいただければ、今までバラバラに教えられてきたことが全部つながってきて、歴史の流れというものはどういうものか、より具体的にイメージできるはずです。本日の講演が、皆さんに歴史を俯瞰で捉える視点を持っていただくきっかけになれば幸いです。

ワークショップ

6つのテーマで開催された各セッションのレビューをご紹介します

Theme : 最先端テクノロジー情報の提供

人工知能の現状と将来の展望
ー生成AIは何をもたらすのかー

Lecturer

○○○○○○○○○○

富士通株式会社
技術戦略本部
SME推進統括部
シニアディレクター

松本 安英

Overview

生成AIの登場と急速な発展により、AIは第4次ブームに入ろうとしています。生成AIの動向、大規模言語モデル(LLM)の活用、富士通のAIプラットフォームの取り組みなど、ビジネスに役立つ生成AIの最新情報を紹介しました。

Review

AIの概略から最近話題の生成AIや富士通の最新の取り組みまで、AIに関する基礎知識を広く網羅的に紹介いただきました。

取り上げられたテーマの中では、「生成AIは上流工程の業務を変革し、ホワイトカラー層への影響が大きい」という内容が最も納得できました。今後、生成AIがさらに進化すれば、戦略的意思決定など、経営の仕事もAIに代替されるようになるかもしれないと感じました。また、スーパーコンピュータ富岳の活用では「1023 FLOPSの計算量の学習で創発性を観測」という報告が非常に興味深く、シンギュラリティに一步近づいたかも、という感想を持ちました。

全体的に広く浅くという内容だったため、もう少し講演時間が長いとさらに深く理解できたかもしれないと感じました。

編集委員 株式会社エムエムインターナショナル 山宿 信也

Theme : みらでぎ秋季大会 若手交流会

異業種若手同士で考える
私たちの未来の選択

Facilitator

○○○○○○○○○○

株式会社富士通ラーニングメディア
ナレッジサービス事業本部
マネージャー
組織カルチャー変革パートナー

城能 雅也

Overview

自身の未来にはどんな選択が待っているのか。今話題のChatAIに未来のヒントを聞きながら、異業種若手社員同士が多様な視点で対話することで、自らのキャリア形成に向けた思い・価値観を引き出し、行動変容のきっかけに。

Review

本ワークショップの目的は、普段、交流や対話の機会が少ない異業種の若手社員同士が横のつながりを持ち、他者からの刺激や新しい視点、考え方などを取り入れることです。

4名ずつ4つのテーブルに分かれた参加者たちは、「私たちのターニングポイント」「未来に訪れるターニングポイント」「私たちのキャリアとは」の3テーマで、ChatAIへの質問を交えながら、セッションと対話を繰り返しました。初めは初対面同士でぎこちなかった対話が、次第に活性化し、互いについて理解を深めるのはもちろん、今まで無自覚だった自身の価値観にも気付くなど、発見に満ちた時間を過ごしました。ここでの気付きや体験が、今後のキャリア開発に向けた貴重なヒントとなることが期待されます。

ファミリー会事務局

Theme : 経営層交流会

企業価値向上と人的資本経営



Lecturer

○○○○○○○○○○

富士通株式会社
CEO室 Co-Head

西 恵一郎

Overview

労働人口の減少、労働市場の流動化をきっかけに、企業の人材への向き合い方は大きく変化しています。人と組織の観点から、人材から選ばれる会社になるための取り組みと、企業価値向上に向けた取り組みを紹介しました。

Review

ファミリー会のあるべき姿の議論の中で、若手から経営層までが様々なレベルでコミュニティを形成し、それぞれの課題解決に取り組む活動をするという方向性が打ち出されています。本セッションでは、経営課題解決のコミュニティ活動を模擬体験できました。

人的資本経営は、「人材を「資本」として捉え、その価値を最大限に引き出すことで、中長期的な企業価値向上につながる経営」です。富士通では「人的資本価値向上モデル」というフレームを基に検討プロセスを定義し、企業変革を実践していると西氏から紹介されました。ワークショップではこのフレームワークの一部を体験することができ、さらに深掘りしていきたいと感じました。

編集委員 日本通運株式会社 大林 孝至

ワークショップ

6つのテーマで開催された各セッションのレビューをご紹介します

Theme : 働き方改革

WorkとLifeを豊かにする未来の働き方×AI
ーテクノロジーが生み出す新しい価値とはーLecturer
*****富士通株式会社
シニアエバンジェリスト
松本 国一

Overview

「働き方改革」の課題解決に向けて、テクノロジーが生む新しい価値への期待感が高まっています。本ワークショップでは、新たな視点として「AI」をキーに、参加者同士が「未来の働き方」を描き、実現に向けたアイデアやヒントを共有しました。

Review

本ワークショップでは、様々なシーンでAIに任せたいと思えるカードを直感で各自3枚ずつ選択し、AIがどのくらいの時間手伝ってくれそうか、またそれにより空いた時間を何に使いたいかをグループごとに話し合い、発表しました。

AIに任せたいこととしては、仕事の効率化や健康、趣味などが、また、それにより空いた時間の活用法としては、家族との時間や自己研鑽など、どんなに技術が発達しても自分自身（人間）でなければ務まらないことが挙げられました。

今後もAIが発達する中で、AIと人間、互いの得手不得手を理解しながら、シフトできる部分はAIに任せ、自分にしかできないことには大いに時間を使うという見極めが必要になってくると感じました。

編集委員 株式会社ITAGE 長嶺 博美

Theme : 地域貢献、経営・文化講座

感動をお渡しするために

Lecturer
*****はままつ
フラワーパーク理事長
樹木医
塚本 こなみ 氏

Overview

来場者数の低迷が続き、閉鎖の危機にあった「はままつフラワーパーク」の業績をV字回復させた塚本氏。パークが担う地域活性化の視点などにも触れながら、人々が感動で震える美しいパークづくりへの飽くなき挑戦が語られました。

Review

藤シーズンに足利フラワーパークを訪ねて、その素晴らしさに言葉を失った経験があります。その足利フラワーパークの藤棚を作り上げた塚本氏も、はままつフラワーパークも、全く知らなかった私ですが、「浜松で理事長が手がけた場所はどんなに素敵な空間だろう」とぐいぐい引き込まれました。

「まあまあ綺麗なだけでは駄目、本当に綺麗と思ってもらえる「感動」をお渡しする」ことを常に考え、絵画のような「映える」空間の提供に手間を惜みず、時には私財まで投じる。こうと決めたら行政も動かすバイタリティと信念。理事長就任時に公園にすればと言われていたはままつフラワーパークを再生された塚本氏の言葉は、穏やかな語り口の中にも熱い思いに満ちていて、あっという間の1時間でした。

編集委員 FITEC株式会社 星 さゆり

Theme : LS研究委員会 研究成果報告

Leading-edge Systems 最優秀研究賞
「業務サービスの正常稼働担保に関する
方法論の研究」清水建設株式会社
デジタル戦略推進室
情報システム部
遠藤 樹 (右)
三菱食品株式会社
情報システム本部
榎嶋 遼平 (左)

Overview

最優秀研究賞、独創的研究賞をダブル受賞した研究成果を報告。クラウドサービス、特にSaaSの監視項目としてSNSの投稿遷移に着目し、障害の早期検知、障害時の業務時間損失の軽減を実現する施策のポイントを発表しました。

Review

クラウドに移行した企業内システムの運用管理は、多くの企業に共通する課題です。クラウドサービスに障害が発生した場合、原因究明や復旧作業はサービス事業者に委ねることになるため、企業内の運用管理者にとっては、社内ユーザーへの障害通知のタイミングが難しく、結果として時間損失を増大させる懸念があります。

本研究では、障害発生時の早期対応を可能にする監視項目として、社内ではヘルプデスクへの問合せ、社外ではSNSに着目。両者を監視・照合して早期に障害を通知することで、ユーザーは代替システムに切り替えて業務を継続でき、運用管理者の負荷を削減できることが証明されました。

※本研究の詳細は会報Family411号に掲載されています。

ファミリ会事務局

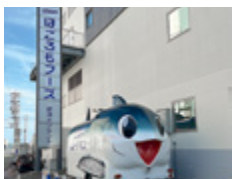
プログラム 1

はごろもフーズ様と世界遺産見学コース

はごろもフーズ新清水プラント

日本平夢テラス

世界遺産 三保の松原



Review

はごろもフーズ様の工場では、5重6重の安全管理で安全・安心を究極まで追求する缶詰の生産工程を見学しました。

小学生をターゲットにしたというプロジェクションマッピングによる生産工程の案内がとてもわかりやすく、多くの工程が必要な缶詰製造の全体像が容易にイメージできるように工夫されていました。

1ラインあたり1分間に200缶以上が作られる超高速の生産工程は、センサー等の先端技術と人間の力が非常にうまく組み合わせられており、スピードと安全性が確立されています。作業服もすべてICタグで管理され、工場外へ持ち出しができなくなっているなど、外部から細菌等が入り込むことを徹底的に排除する仕組みも印象的でした。

また、IoTとFujitsu Intelligent Dashboardを組み合わせ、全工程の稼働状況を画面で可視化し、各工程の詳細画面にワンクリックでドリルダウンできるなど、効率的な管理を実現していることが印象に残りました。

昼食後、日本平では見えていた富士山が、三保の松原では雲の中に隠れてしまったのが、残念でした。

編集委員 株式会社エムエムインターナショナル 山宿 信也

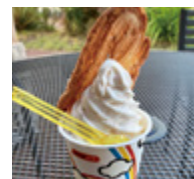
プログラム 2

浜松 感動ミニセミナーと体験コース

はままつフラワーパーク

航空自衛隊浜松広報館エアパーク

うなぎパイファクトリー



Review

最初の訪問地は、前日塚本理事長のセミナーに参加しワクワクが倍増した「はままつフラワーパーク」。理事長のミニセミナーを皮切りに、理事長と職員のガイドで温室とローズガーデン見学、噴水ショーや散策など、時間が許す限り堪能し、桜、チューリップ、藤のベストシーズンに開催される「浜名湖花博（2024年3月23日より）」に合わせて再訪したいと思いつつパークを後にしました。

昼食は「浜松と言えば鰻」とうなぎに舌鼓。午後の見学は浜松城前を通過しながら「航空自衛隊浜松広報エアパーク」を訪問。ブルーインパルスや歴代航空機の展示だけでなく、映像シアターやコックピットへの搭乗、VRシミュレータでのミッション参加など、様々なコンテンツで楽しみました。そして最後は「うなぎパイファクトリー」へ。バスガイドさんからの事前情報提供のおかげで、短時間ながら効率よく回ることができました。うなぎパイナッツは完売でしたが、ナッツ入りのうなぎパイジェラートが食べられて満足。

出張では何度も訪れたことがある浜松ですが、浜松再発見となった楽しい1日でした。

編集委員 FITEC株式会社 星 さゆり

プログラム 3

今話題の徳川家康 歴史をたどるコース

どうする家康 静岡大河ドラマ館

久能山東照宮

駿府城公園

静岡浅間神社



Review

2023年の大河ドラマ「どうする家康」。主人公の徳川家康が人生の1/3を過ごし、非常に愛した町と言われている静岡で、歴史をたどるコースに参加しました。

最初に「静岡浅間神社」とその敷地内の「どうする家康 静岡大河ドラマ館」へ。ドラマ館では、登場人物の等身大パネルや相関図、衣装の展示や松本潤さんからのメッセージを拝見。その後、日本平ロープウェイに乗って、家康公が祀られている「久能山東照宮」を参拝しました。本殿や拝殿は権現造りで、非常に色鮮やかで美しく、また博物館では洋時計をはじめ貴重なものが数多く展示されていました。

昼食後は再び静岡市街に戻り、「駿府城公園」を見学。市民の憩いの場になっているという広大な公園で、坤櫓（ひつじさるやぐら）や紅葉山庭園などの見どころを散策しました。

静岡は温暖な気候で（11月でも汗ばむ陽気でした）、風光明媚な場所が多く、家康が静岡を愛したというのも納得できると感じました。実は、私自身は今年の大河ドラマを見ていなかったのですが、改めて1話から見てみようと感じるくらい、魅力的なコースでした。

編集委員 株式会社ITAGE 長嶺 博実

人類の夢を乗せて膨らみ続ける 宇宙ビジネスのビッグバン前夜を探訪

第1部 迫り来る宇宙産業時代

宇宙が私たちの日常に近づいてきた。1950年代に国の主導で歩み出した宇宙開発は、2000年代以降、民間資本が参入し商業化が加速。ビジネスチャンスを狙ったスタートアップをはじめ、これまでの技術を活かした企業など、様々な分野から宇宙産業への参入が続いている。通信や気象、GPSなどの人工衛星を活用したインフラやサービスは、すでに日常では必要不可欠となっている。これから宇宙を舞台に何が起こるのか。ビッグバンへの秒読みが始まっている。

人工衛星等の打上げ数の推移 (2013年~2022年)

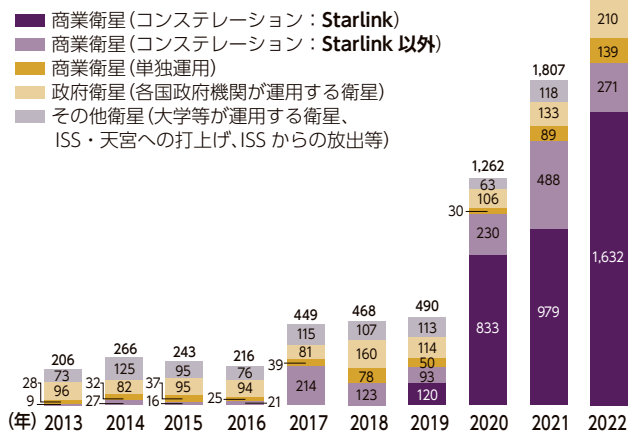


図1) 過去10年間の人工衛星等の打上げ数の推移

世界が注目する「宇宙ビジネス」

宇宙ビジネスのグローバル市場規模は、米モルガン・スタンレーの調査によると2040年までに140兆円(1兆ドル 1ドル140円計算)規模になると想定^{*1}され、今後も拡大すると予測される。

2020年代以降の宇宙ビジネス拡大は、民間企業によるイノベーションの寄与によるものだ。特に人工衛星は2020年から急激に増加。2022年には過去最大の2,368機^{*2}が打ち上げられた(図1)。この人工衛星を利用したサービスは通信や放送、GPS、天気予報など、私たちの生活インフラとして必要不可欠なものになっている。

今後も通信衛星、地球観測衛星、ロケットのほか、旅行、創薬、資源開発などに民間企業が進出し、関連ビジネスを含め宇宙ビジネスは大規模な市場となる可能性が高い。

日本政府も宇宙ビジネスの重要性を認識し、2023年6月13日には新たな宇宙基本計画を閣議決定し、2030年代早期に国内宇宙産業の市場規模を2020年比2倍の8兆円^{*3}にするという目標を掲げた。また、ISS(国際宇宙ステーション)運用への参加を2030年まで延長して、宇宙ビジネスに参入を目指す企業や団体に対し、ISSの

利用を促進する施策を打ち出している。

宇宙を目指して開発が進む製品やサービスは、ベンチャーでも精密で高度な技術を持つものが多い。JAXA(宇宙航空研究開発機構)の新事業促進部では、民間で宇宙ビジネスに取り組むベンチャーをJAXA認定とする「JAXAベンチャー」を設け、顕在化がなされていない分野にも宇宙ビジネスを進展させる取り組みを行っている。この「JAXAベンチャー」に認定された日本企業は、現在12社^{*4}となっている。

*1 Space: Investing in the Final Frontier, Morgan Stanley, 2020/9/24
<https://www.morganstanley.com/ideas/investing-in-space>

*2 宇宙輸送を取り巻く環境認識と将来像(内閣府宇宙開発戦略推進事務局 2023/6/27)
<https://www8.cao.go.jp/space/comittee/05-yuso/yuso-dai2/siryou2.pdf>

*3 宇宙基本計画(宇宙開発戦略本部決定/閣議決定 2023/6/13)
https://www8.cao.go.jp/space/plan/plan2/kaitei_fy05/honbun_fy05.pdf

*4 JAXAベンチャーの紹介(JAXA新事業促進部)
<https://aerospacebiz.jaxa.jp/venture/>

先端技術を市場に興す日本

日本の宇宙産業では、最先端技術を活かした衛星が実力を発揮している。例えば、地球観測機「だいち2号

第1部 迫り来る宇宙産業時代

(ALOS-2)は、デジタルカメラのように太陽光を利用した光学センサーの観測ではなく、地球に向かって電波を照射し、その跳ね返った電波を受信して観測が行える。太陽光を利用しないため、昼夜を問わず地表の観測が緻密にできるSAR(レーダー)を搭載しているのだ。そして、2023年度内にSARを進化させた「だいち4号(ALOS-4)」の打ち上げを予定しており、詳細な地表観測を可能にする。さらに、SAR衛星を使った事業を展開するベンチャー企業も現れ、SARデータを利用する画像解析は、様々な分野での活用が期待されている。

このように高性能な日本の衛星に蓄積されたデータは、地盤沈下や災害被害といった自然環境への監視に役立つほか、農業や土木などの分野でも利用が進んでいる。

また、日本は宇宙探査にも積極的だ。JAXAは、月、火星、小惑星への探査ミッションを計画し、準備を進めている。宇宙探査は、宇宙の謎や起源を解明するだけでなく、宇宙資源の開発や宇宙産業の創出、国際的協力関係や外交にもつながる。

自治体の動きも活発化し、大分県や北海道は宇宙船の空港になるスペースポートの実現に向け動き始めている。福井県では、自治体主導による超小型人工衛星「すいせん」が2021年3月にカザフスタン共和国の宇宙基地から打ち上げられた。衛星のデータを利用したビジネスの創出で地元の産業活性を図る狙いだ。

現在、地方自治体が独自に取り組んでいる宇宙ビジネスは、北海道、茨城県、福井県、群馬県、岐阜県、鳥取県、山口県、福岡県、佐賀県、大分県、鹿児島県の11道県と長野市、豊橋市の2都市(2023年10月末現在)で、内閣府と経済産業省が共同で運営する「スペース・ニューエコノミー創造ネットワーク(S-NET)」の「宇宙ビジネス

創出推進自治体」として選定されている。

宇宙を目指す日本企業

宇宙ビジネスは、これからの民間による効率的なロケット打ち上げや宇宙ステーションの建設といった技術革新に期待が寄せられる。しかし未だ、投資から市場の顕在化までが未知数な将来型ビジネスだ。

日経BP社が国内製造業などを対象にまとめた調査レポート『宇宙ビジネス 事業創出・参入戦略』^{*5}によれば、宇宙環境と地上環境の2分野の事業で「参入に前向きな企業」は「宇宙環境における事業」については3割弱、「地上環境における事業」では2割強と決して多いとは言えない数字である(図2)。宇宙ビジネスは、明確な市場範囲がなく、国際情勢の影響など変動要素も懸念される。進出に慎重な企業が多いことは否めないといった現状が読み取れる。

しかし、宇宙ビジネスに意欲的な企業に対して今後の意向を探ると「取り組みの縮小を検討する」企業は全くなく、「さらに積極的に取り組む」という回答が約5割と、意欲的な結果になっていた(図3)。今後の新しい社会インフラの構築や、人類の活動範囲拡大、そして何より、未知なる空間への知的好奇心に溢れる宇宙産業に向けて、新たな市場の創出を目指す企業は、宇宙ビジネスのグローバル競争に挑戦している。

期待が膨らむ未来の世界

2023年8月から6か月間の予定で、ISSに長期滞在する古川聡宇宙飛行士は、宇宙からインターネットを通じ

て地球にいる私たちと交流を続けている。ISSに滞在する宇宙飛行士は、2010年から規則に準じ、インターネットを自由に使えるようになり、地球にいる私たちはリアルタイムで宇宙からのメッセージや写真を受け取ることができる。また、スペースXのCEOイーロン・マスク氏は2030年までに火星に基地を作ると宣言し、NASA(米航空宇宙局)は「アルテミス計画」で月を目指し、その先の火星を見定める。

宇宙がどんどん私たちの生活に身近になっている。宇宙で何ができるのか。人類の未来を拓く「宇宙ビジネス」が、私たちの前にリアルに迫っている。

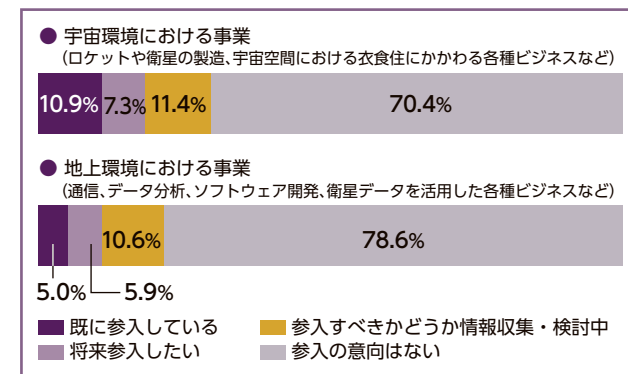


図2) 宇宙ビジネスへの参入意向

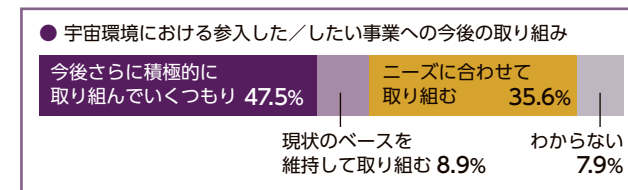


図3) 参入した/したい宇宙ビジネスへの今後の取り組み

*5 宇宙ビジネス 事業創出・参入戦略(日経BP)
<https://www.nikkeibp.co.jp/atcl/newsrelease/corp/20231208/>

第2部 社会課題解決に向けた宇宙ビジネスの新たな可能性



Commentator



富士通株式会社
ソリューショントランスフォーメーション本部
クロスインダストリービジネス推進室
シニアマネージャー

光田 千紘

「月における宇宙ビジネス」の企画を自ら会社に提案。それが事業として認められ、2023年に現部署へ異動。名古屋大学の富士通製スーパーコンピューターを活用し、宇宙天気予報の高度化の研究を進める。



富士通株式会社
パブリック&ヘルスケア事業本部
TC事業部
マネージャー

齋藤 悠

JAXAの衛星データ関連システム開発に従事した後、衛星データを活用した社会課題解決プロジェクトを企画立案から推進。現在は宇宙分野に限らず、科学技術を活用したビジネス開発に取り組む。

Facilitator



FITEC株式会社
経営企画室
パートナー戦略課 課長
会報Family 編集委員

星 さゆり

システムソリューションを提供するパートナー企業との情報窓口を担う。「宇宙が大好き」という理由から、今回の宇宙ビジネスを語り合う座談会のファシリテーターとして参加。

宇宙は人類の最終フロンティアと言われている。ロケットや人工衛星が活発に打ち上げられ、近年では宇宙開発の技術を利用した社会の課題解決に貢献するプロジェクトも注目を集めている。富士通で宇宙関連事業に携わる光田千紘と齋藤悠、ファシリテーターとしてファミリー会の星さゆりを迎えて、大きな可能性を秘めた「宇宙ビジネス」を展望した。

未来の月面で天気予想図を描く

星 光田さんは富士通でどのような宇宙関係のお仕事をされているのですか？

光田 私は未来の月ビジネスにつなげるための研究を行っています。NASAが進めるアルテミス計画は2026年に人類の月面着陸を目指していますし、その先には、月面基地の建設や火星への有人探査が視野に入られています。ほかにも1000人が暮らし、1万人が訪問するという月面都市のビジョンを描く日本のベンチャー企業もあります。長年培ってきた富士通の技術を、これから開発が進む月に向けて発展させながら、その知見を地球上の社会課題解決にも活かすことで、地球を含めた宇宙での持続可能な活動を目指していければと思っています。

星 月ビジネスとは、具体的にどのような内容ですか？

光田 1つとしては、月でも人が安全に活動できるよう、月面宇宙天気予報の提供サービスを検討しています。

星 宇宙天気とは一体何ですか？

光田 宇宙天気として身近なものはオーロラでしょうか。太陽は中心で核融合によるエネルギーを作りだし、放出されるエネルギーによって宇宙環境を変動させています。これを宇宙天気と呼んでいます。オーロラは宇宙

環境の変動の結果引き起こされる発光現象なのです。オーロラ以外にも、太陽から加速された粒子が放射線として地球や月に降りかかることがあり、この放射線の量がタイムリーに予測できれば、人が月で活動する中での被ばく量が推測でき、対策につなげることができます。地球で「明日は大雪に注意してください」というような「宇宙天気予報」を可能にするために、名古屋大学宇宙地球環境研究所と共同で、黒点や太陽フレアのデータを活用する宇宙天気シミュレーションの高度化に取り組んでいます。



オーロラは大気圏ぎりぎりのところに現れる。地上からの距離はおよそ100km。宇宙と地球を仕切るカーテンは意外なほど近くにある。

災害から人の命を守る宇宙ビジネス

星 齋藤さんは光田さんと、別の部署ですがどのような宇宙ビジネスに取り組んでいるのでしょうか？

齋藤 宇宙を研究するというより、社会課題の解決手段として、広い意味で宇宙を利用する部署にいます。地球観測衛星のデータを富士通のソフトウェアで解析し、防災に活用する取り組みなどです。

星 宇宙から地球を見るということですね。

齋藤 そうです。宇宙から観測した災害前後のデータを解析すれば、広域な被災箇所を一度に把握できます。例

第2部 社会課題解決に向けた宇宙ビジネスの新たな可能性

えば、宇宙から取得できるデータと被災シミュレーション技術を活用することで、土砂災害や津波災害などの影響範囲が予測でき、住民の避難訓練などにも役立ちます。技術の進化により人工衛星が取得するデータの解像度・観測頻度が向上し、シミュレーション技術もAIやHPC(High Performance Computing)により、高精度な情報を伝えることが可能です。

星 住民に正確な津波の情報が届けられ、どこに逃げるかを伝えることができれば、避難誘導に役立ちますね。

齋藤 この技術は、自然災害発生時の被害把握のほか、畑の農作物の管理、海の安全といった監視に有効です。このような衛星データを活用する新しいアプローチで、国や自治体、民間企業の経営課題・社会課題の解決を目指しています。例えば、福井県民衛星プロジェクトでは、福井県が地方自治体初の人工衛星を打ち上げ、防災・森林管理・農業分野の行政業務で衛星データの活用が進められています。

半世紀以上にわたる富士通と宇宙の関係

星 齋藤さんの部署で、そのほかに取り組んでいるプロジェクトを教えてくださいませんか？

齋藤 私の部署では、宇宙のデータを「使う」だけでなく、「支える」「導く」の観点でプロジェクトを推進しています。「支える」は、人工衛星の動作や観測データの管理など、人工衛星そのものの運用の支援。「導く」は、人工衛星の現在地の特定や目的地までのルートを算出する「軌道解析」を駆使して、惑星探査ミッションを支援しています。軌道解析技術を活用したプロジェクトで代表的なのは、小惑星探査機「はやぶさ」ですね。地球から3億km離れ

た直径500m程度の小惑星「イトカワ」まで導き、サンプルを取得して地球まで帰還させたミッションに貢献できたことは、本当に感動しました。

星 軌道解析というのは、複雑な計算なのですか？

齋藤 宇宙空間にある人工衛星から送信される限られた情報をもとに位置を解析し、また、限られたエネルギーで非常に遠くの目的地まで導く必要があり、非常に複雑な計算を実施します。実は、富士通はこのような技術開発に1970年代から研鑽を積んでおり、日本の宇宙開発の発展に寄与してきました。

星 半世紀も前から、富士通が宇宙開発に携わってきたとは驚きです。

宇宙ビジネスに対する日本の課題

星 宇宙関連のニュースで出てくるのは、海外の企業の話ばかりのような気がします。日本のインパクトが弱いと思うのですが、どうでしょうか？

齋藤 日本でも取り組みが活性化しているものの、確かに欧米や中国に比べ、インパクトが弱い印象はあるかもしれません。その背景として、日本は国土が狭く、カメラや気象センサーなどがたくさん設置されており、国内では隔々まで目が届いていることが挙げられます。そのため、宇宙のような遠くからの観測だと、地上で取得できる情報と比較して現時点では精度が劣るので、費用対効果が見えにくいのではないかと思います。

星 私は、未来の地球では車が空を飛び、無人電車がチューブ内を走る、そういう革新的な技術の提唱に夢を見て育った世代ですが、なんだか今の若い世代は宇宙や科学で夢を見ていないような気もしています。

齋藤 若い世代は教科書やネットで宇宙や科学の最新情報を知っていますから、ただ未来の凄い絵に憧れていた時代よりも、現実的に世の中を見ているのだと思います。夢だったことが本当に実現しており、科学が非常に進歩した結果だと思っています。

光田 これは個人的な意見ですが、未来を空想できるようにするには、新しい技術にチャレンジする環境や文化が必要だと思っています。でも日本は、高度成長期での先人の努力もあって社会の仕組みが意外と上手に出来上がって、次のチャレンジに消極的な、わざわざ変えたくないという感覚が社会にあるように感じます。だから「すぐやってみよう」とはならないのではないのでしょうか。

星 今すぐにでも実装が可能で、社会的に役立つ日本の先進的な技術がたくさんあるはずなのに、時間がかかるのはもったいないと思いませんか？

光田 真面目な日本人は安全と精度に100%を求めるので、どうしても時間がかかってしまいます。試す場所がないという問題も大きいです。

星 IT業界では、変化の激しい世の中のスピードに合わせて、無駄をそぎ落とし、短い期間、小さなユニットで開発するアジャイルが受け入れられています。宇宙開発も今をターゲットに「ともかくやってみよう」という姿勢がほしいですね。

次に注目される宇宙ビジネスは？

星 今は、衛星データを利用する宇宙ビジネスが成長していると聞きますが、次はどんな分野が伸びてくると思いますか？

齋藤 既存の宇宙産業でも、これからの想定宇宙産業で

第2部 社会課題解決に向けた宇宙ビジネスの新たな可能性

も、民間が関わる宇宙ビジネスは、どこに採算の取れるニーズがあるかで、取り組みの優先順位が変わってくるでしょう。

星 宇宙というロマンを追うだけでは駄目で、ビジネスとして収益の確保が求められるということですか？

齋藤 ロマンをお金にして、持続可能なビジネスにしていくことが重要ですよ。そういう意味では、宇宙観光の優先順位が一番後になりそうですね。

星 そんな！私は昔の宇宙アニメのヒーローにずっと憧れていて、普通の人が宇宙に行けるのなら、お金は頑張っただけで何とかして、今すぐにでも行きたいのですが…。

齋藤 行きたい人がどれだけいるのかというニーズとコストの関係なので、星さんのような人が増えればきっと優先順位が上がってきます。仲間を増やしましょう。

光田 仲間が増えて伸びるということでは、医療分野にも期待したいですね。無重力で無菌な宇宙空間で人体への影響を研究する事業も始まっています。医療はニーズの高い分野ですから、人が月に行くような時代では、低重力を活用するなど、宇宙ならではの医療はもっと注目されると思います。

人類が宇宙で生活できるようになったなら。そこでの医療、水、食料、エネルギーなどの研究開発は、地球の環境、社会にも大きなインパクトをもたらすだろう。



進む宇宙開発の裏側にある課題

星 宇宙ビジネスには課題もあると思います。例えば、衛星写真はかなり解像度が上がっていると伺いましたが、個人情報問題は大丈夫なのでしょう？

齋藤 実際には、宇宙から見えるカメラで個人を特定することは難しいです。人間を真上から見ているので、頭だけ丸く映っている状態で、人が集合しているとか、大体何人くらいいるか、くらいはわかりますが。

星 撮影データの規制などはあるのですか？

齋藤 日本では、人工衛星から得られる情報をリモセン法*という法律で規制しています。個人情報保護法もありますので、あまり心配しなくても大丈夫です。

星 課題と言えばもう一つ、廃棄された衛星や打ち上げロケットから出る不要な人工物が軌道に漂って、宇宙ゴミになっているという環境問題を最近耳にします。

光田 スペースデブリのことですね。人工衛星に衝突する事故も起こっていて、宇宙の環境問題として、関係各国で対策が検討されています。

齋藤 日本でも、世界に先駆けてスペースデブリの回収を可能にする技術を開発する民間事業者が出ています。富士通も、JAXAが運用する「JAXA 宇宙状況把握システム」に、スペースデブリの軌道を解析する技術を提供しています。

星 スペースデブリを捕まえるというのは凄い技術だと思います。実現すれば、宇宙船への燃料補給や衛星の修理にも応用が期待できますね。

齋藤 スペースデブリがなくなって宇宙空間が安全になり、宇宙での経済活動がより活発になる。こういう価値の循環を生むような仕組み・技術が、宇宙ビジネスを持

続可能にしていきます。とても大事なことです。

※衛星リモートセンシング記録の適正な取扱いの確保に関する法律（通称リモセン法）

世界の課題解決を日本の技術で

星 最後に、宇宙ビジネスの展望をお聞きしたいです。

齋藤 社会課題に対して、宇宙技術を使って何かしようという発想は10年以上前から言われていますが、実現してきませんでした。でも今後は、宇宙技術から課題解決のアイデアを引き出すのではなく、社会に必要なというニーズに宇宙技術を当てはめるような世界観で、進展していくのではないのでしょうか。

星 温暖化対策やがん治療などに、研究成果が活かされる可能性もありますね。

齋藤 ニーズの対象範囲は無限に広がります。例えばスマートシティや公共事業のDXでは、もっといろいろな衛星データの利活用が考えられます。潜在的な課題意識の中から、企業や地域にあったニーズを、私たちが掘り起こすことが重要です。

光田 私は日本を科学技術立国だと思っていますが、宇宙開発は一国でやっていくというより、グローバルにみんなが仲間になっていく産業だと感じています。各国の強みを活かしながら、技術的にもビジネス的にも連携を強めていくことによって、本当に望まれる世界規模の宇宙ビジネスにつながっていくはずですよ。

星 私が思っている以上に宇宙のことがわかってきていて、頑張っている人がいることを知ることができ、本当に心強く希望を感じました。富士通の挑む力に期待しています！

FUJITSU ファミリー会をもっと楽しく活用していただくための様々な情報をご提供します

会報編集 委員から

編集委員長 山宿 信也
株式会社エムエム
インターナショナル



2023年度の秋季大会は、東海支部内で初開催となる静岡県で開催されました。

『2030年の日本の未来を共に創る』をテーマに、富士通からはサステナブルな社会の実現に向けて、SXへの取り組みや、新事業ブランド「Fujitsu Uvance (ユーバンス)」の紹介がありました。

また、パネルディスカッション「地域と共に創り上げる未来」では、静岡を舞台にした産学官それぞれの取り組みが紹介されました。

今回は、新しい試みとして、ワークショップを階層別に6会場同時進行で実施しました。定員を30～50名に限定し、そこからさらに10名以下のグループにしたことで、全国から集まった会員同士お互いの

顔が見える、距離の近いディスカッションができました。

2024年は、FUJITSUファミリー会60周年の節目の年となります。

各支部様々なイベントを予定されていると思いますが、全国の支部活動を、誌面上でたくさん紹介できることを楽しみにしています。ぜひ、皆さんの取り組みをご寄稿いただければ幸いです。

FAMILY NEWS

<https://jp.fujitsu.com/family/familynews/fnews.html>



クロスワードパズル 正解発表

Family411号「クロスワードパズル」へたくさんご応募いただき、ありがとうございました。正解の中から50名様に記念品をお送りいたします。次回のクロスワードパズルもお楽しみに。

正解

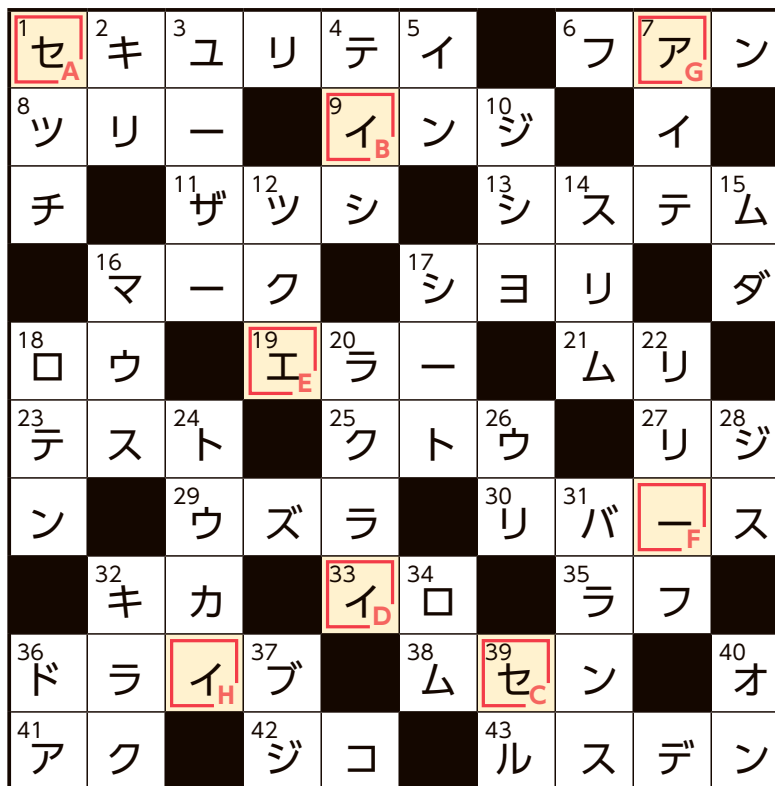
A セ B イ C セ D イ E エ F ー G ア H イ

正解者発表

(お名前またはペンネーム)

辻井 正広 様	宮下 紗嬉 様	定常 莉奈 様
福田 晴之 様	竹之内 歩 様	柁瀬 恵里 様
小早川 亮 様	藤野 真宏 様	荒川 秀行 様
田伏 一志 様	石川 彰吾 様	黒川 光彦 様
西原 寛治 様	池谷 正 様	鹿田 加奈子 様

ほか



NEW FAMILY

(10～12月度ご入会分)

■ 関東
オリックス銀行 (株)

■ 東海
遠州トラック (株)



in
Kawasaki

先端AI技術を素早く試せる新たなAIプラットフォーム

「Fujitsu Kozuchi (code name) - Fujitsu AI Platform」のご紹介

AIの実践、活用を具体的に検討し、自社での課題解決につなげたいとお考えの会員企業の皆様と、富士通研究所の開発者とで意見交換会を行いました。

／開／催／概／要／

テクノロジーフォーラム

～AI・生成AI最新技術動向と
富士通AIプラットフォームの適用事例～

富士通では、AIイノベーションコンポーネントおよび、AIコアエンジンを2023年4月からグローバルに公開。今回は「Fujitsu Kozuchi (code name) - Fujitsu AI Platform」および「AI・生成AIの最新技術動向」のご紹介に加え、富士通研究所の最新技術の展示見学、富士通研究所の開発者と意見交換をしていただけるセミナーを開催しました。

主 催：FUJITSUファミリー会 事務局

開催日時：12月4日(月) 13:30～18:00

■ 13:30～14:30 テクノロジーホール展示見学

■ 14:40～15:40 講演

「Fujitsu Kozuchi (code name) - Fujitsu AI Platform」の紹介

-AI・生成AIの最新技術動向と適用事例紹介-

講師／富士通(株) 技術戦略本部SME推進統括部

シニアディレクター 松本 安英

■ 15:40～15:50 「ハルシネーション検知の話をはじめ

Kozuchi化されたトラスト技術の紹介」

講師／AIトラスト研究センター

シニアリサーチマネージャー 毛利 隆夫 氏

■ 16:00～17:00 意見交換会

参加者と富士通研究所・事業部門との意見交換

開催場所：富士通株式会社 川崎工場

参加人数：18名／オンライン参加は158名
(講演のみライブ配信)対 象：AIを活用して自社課題を早期に解決
したいと検討中の方、経営層、部長層、
課長リーダー層

Fujitsu Technology Hall見学会

まずは、全国から集まった会員企業の皆様に、富士通が将来を見据えて開発してきた多くの技術、人々に愛され続けている製品、脈々と受け継がれてきたお客様起点の発想から生み出した挑戦の歴史をご案内すべく、見学会からスタートしました。

History Zoneでは、80年以上に及ぶ歴史の一部をご紹介。主に製品開発の研究や設計の数値計算に活用されていた1960年製造の中型の科学技術計算用リレー式計算機「FACOM138A」を実際に動かし、8桁までの円周率を印字する工程をご覧ください。

続くPresentation Zoneでは、富岳や量子コンピューティングなど社会課題の解決に貢献するコンピューティングテクノロジーをご紹介。最後のNow & Future Zoneでは、社会の発展に貢献していく様々な分野の最新技術をご紹介しました。行動分析技術「Actlyzer」のデモでは、実際にカメラを通したご自身の「しゃがむ」「歩きスマホをする」などの行動や「怒る・泣く」などの表情検知を体感いただきました。

意見交換会

AI・生成AIの最新技術動向と業務適用事例講演／「ハルシネーション検知の話をはじめKozuchi化されたトラスト技術の紹介」の講演後、2グループに分かれて意見交換会を実施。各グループには、講師の松本、毛利も参加し、各社での取り組みや困りごとなどについてディスカッションしました。各社の状況が共有でき、連帯感に満ちた穏やかな時間となりました。



アンケート

Q 富士通AIについて

- 利用側からするとユースケースによって利用最適な製品を割り振っていただけると凄く良いと思う。
- Kozuchiについては「どういう技術で、どれだけのものを今学習されてますよ」というようなアピールがもっとほしい。
- カスタマイズ可能であればKozuchiを利用してみたい。

Q 生成AIのビジネス活用について

- FAQなどの新しいサービスにAIを活用したり、クラウドサービスにAIを活用できないか検討している。
- 社内で学習したデータを使って回答を導きだしているが、検索の精度が悪い。こういった仕組みが良いのか検討をしている。「Kozuchi」で解決できるのか試してみたいと思っている。
- 音声認識のAIに興味がある。議事録の書き起こしや製品の異音チェックで使えないかと思っている。
- 電話でご予約を受けているが、今後はWebで予約できる仕組みを検討していこうと考えている。コールセンターの事例は深掘りして聞いてみたい。

in
Osaka/
Hiroshima

2023年度も活動方針に沿ったイベントが続々登場！

集合型ワークショップ「情報交換会」&交流イベント

様々な悩みについて他企業・他団体と直接話し合うことによって、課題解決の糸口を見つけたり、意見交換を重ねることで会社や階層、業務の枠を超えた持続的な関係を広げたりすることが狙いです。

関西支部 情報交換会「セキュリティ」

社内のセキュリティ推進に携わっている24名の会員が参加。まず、富士通(株)松本 国一が、「デジタル時代に必要不可欠なサイバーセキュリティ」と題して講演を行いました。

講演概要

世界中でデジタル化が進み、生活が豊かになっています。例えばインドでは100都市のスマートシティ化が完了し、ベトナムでは2025年までに行政手続きすべてをオンライン化する計画です。

2021年にパンデミックの中で開催された東京オリンピックでは感染症の感染爆発が心配されていましたが、幸い大きな問題に至りませんでした。一方で、大会期間中のサイバー攻撃は4億5,000万回と非常に多く発生していました。最近ではロシアの放送局をハッカーがジャックするなど、サイバー攻撃は戦争の道具になりつつあります。

日本でも、大量の個人情報や国防などの重要な機密情報が流出したり、ランサムウェアが問題になったりと、サイバー攻撃の規模は年々拡大しています。こういった被害にあうと、流出した個人情報が悪用されるほか、ランサムウェアでプログラムが圧縮され工場の生産が停止になるなど不測の事態が発生します。データの修復には

時間も手間もかかり、社会的信用の失墜にもつながり、今後の取引に影響が出ることもあります。

リアルな世界に置き換えて考えてみると、ファイアウォールなどで入り込めないようにするのは、家の戸締まりと同じように考えられます。ネットワークなどの振る舞い検知システムは、リアルの世界の監視カメラと似ています。セキュリティ対策に絶対はありません。随時対策を取りつつ、社員一人ひとりが「知らない圧縮ファイルができて」「コンピューターの動作が遅い」といった異変に早く気付けるようになれば、大きな被害になるのを食い止めることができるでしょう。さらにバックアップも非常に重要です。ただし感染したファイルをバックアップしないように、期間などには注意が必要です。難しく考えず、本格的な対策はぜひ専門家にご相談ください。

共通の課題についてのディスカッション

グループワークでは、松本から「セキュリティに関しては、事例紹介が難しく、他社の取り組みはわかりにくいものです。今日は『ここだけの話』として、できるだけ忌憚のないお話をいただければと思います」とアドバイスがありました。事前アンケートをもとに、関心の高い



テーマ別に分かれてディスカッションをスタート。各グループには事務局からファシリテーターが1人ずつ入り、ホワイトボードを使いながら話し合いました。

Aチーム：エンドポイントセキュリティ／
[社員教育] [シャドウIT]

Bチーム：イントラセキュリティ／
[内製化] [外注]

Cチーム：未知の攻撃に対するセキュリティ／
[社員教育] [情報収集/アップデート]

[社員教育]は、いずれのチームでも関心が高く、様々な観点から話題が出ました。例えば、「社員研修後に疑似メールを送って行われたメール訓練で、開封率が非常に高かった」というお悩みもあれば、「情報システム部門の教育に悩んでいる。SOC (Security Operation Center) と対等に話をするにはどうすれば？」といった課題も語られました。

1つのトピックについて10分話し合う予定が盛り上がり、各20分に延長。時折、大きな笑い声の起こるグループもあり、楽しく情報交換が行われました。

各グループで話し合った内容が共有され、教育に関しては外部機関のトレーニング研修、資格取得、eラー

アンケート

業種によって様々なセキュリティ管理の手法があり、「その手があったか」というところが多々ありました。セキュリティというなかなか他社と会話するにはシビアなテーマではありましたが、いろいろな取り組みが聞けて良かったです。

各社さん、同じような課題があるようでしたが、その中でも自社より進んだ取り組みをされていたり、これから取り組もうとされている内容は非常に参考になりました。

どの企業もそうですが、いくら念入りにセキュリティを設定しても、抜け道がある中で、日々の模擬課題を徹底してやっていくことで、各社員のセキュリティに対する意識が向上していくものだと感じました。

普段聞けない意見を聞けました。不安な点を相談すれば、同じ目線での同意やほかの意見を聞くことができたので今後の参考にできそうです。

セキュリティに関してはEDRを導入している会社が思っていたよりも多かった。弊社でも社内でセキュリティ強化の議論を進めやすくなったと思う。

今回初めて参加させていただきましたが、他社との交流を深め互いに不足している部分を共有しようという部分に関しては、物凄く良いと思いました。



ニングなどが挙げられましたが、IT企業とそれ以外の企業では事情が違うことも浮き彫りになりました。[シャドウIT]は、CASB (Cloud Access Security Broker) 導入を検討されている企業もあり、OSなどのアップデートに関しては、CVSS (Common Vulnerability Scoring System: セキュリティ脆弱性の重大度を表す指標) スコアを参考にして対応時期などを決める、外部に接している機器を重点的に対策するといった運用例も紹介されました。また、セキュリティの予算を「売り上げに対して何パーセント」と決めている企業の例も紹介いただき、貴重な情報交換の場となりました。

交流が深まった意見交換会と交流会

最後に、全体での意見交換会を行いました。例えば、「デバイスの管理はツールでできるが、使用者との紐付けや状態の管理まではできず、表計算ソフトを使って非効率」という多くの参加者が持つお悩みに対し、ノーコードツールを使って管理されている企業からのアドバイスがありました。

また、夜間や週末のEDR (Endpoint Detection and Response) 検知への対応では、各社が様々な運用方法を紹介。取引企業との間のセキュリティ・チェック・シー

トは、年々項目が増えており負担になっているようです。ISMS (Information Security Management System) の認証を受けることを検討している企業もありました。2名で参加してくださった企業からは、同じ事象に対して、現場担当者と管理者の両方の立場から課題を共有いただき、大変参考になりました。

2022年11月の第1回 (人財育成) から始まり、第2回 (働き方改革)、第3回 (DX)、第4回 (AI/ChatGTP)、と開催して来て今回は5回目となる情報交換会でした。会員の皆様から希望のあった旬なテーマを取り上げて開催しており、参加人数も増えております。皆様にとって、今後の業務に役に立つ情報交換会になったならば幸いです。



皆様のお困りごと解決のヒントゲット、横のつながり作りの場として情報交換会をご利用くださいましたら幸いです。

タキイ種苗株式会社
情報システム部
部長 松尾 大成 氏

中国地区ビジネスパワーサミット

目的

地域の会員相互のつながり醸成への人的ネットワークづくりと、会員企業経営層の課題共有・課題解決に向けた意見交換

プログラム

第1回

情報交換
課題発見

集合形式

第2回

課題共有
意見交換

オンライン

第3回

今後の
アクションまとめ

集合形式

山陰地区若手交流企画 イノベーション・ミーティング



Family's Event Picks

集合型ワークショップ「情報交換会」&
交流イベント

アンケート

「山陰地区若手交流企画」ご参加者様より

講義を受けるだけのセミナーとは違い、ワークショップでアウトプットの機会があったのは参加者が主体的になれるので良かった。

他社の方と交流する行事に参加したのは初めてで新鮮でした。最終日の意見を交換し合うワークショップは少し難易度が高く感じましたが、自分では思いつかない意見も取り入れることができ有意義でした。

若手社員が小さく始めるのはもちろん重要だが、会社全体としての大きな変革をしたい場合、DXはトップダウンでスピード感を持って進める必要があると感じる。トップ層にシニアエバンジェリストの松本さんの話を聞いてほしい。

講師の話が非常に勉強になり、懇親会含めカジュアルな雰囲気ですいろいろな方と話をすることができた。

松本講師の複雑な物事をかみ砕いてわかりやすく説明するスキルは、IT営業で働く自分にとっても必須であると感じました。

説明がとてもわかりやすく、DXについてより理解を深められた。

違ったテーマでの研修会にも参加してみたいと思いました。

中国支部 交流イベント

① 経営者ラウンドテーブル 「中国地区ビジネスパワーサミット」

「地域の会員相互のつながりを醸成し人的ネットワークを作ること」と、「会員経営層の課題共有・課題解決に向けた意見交換」を目的として企画。初めての試みとなる今回は、松本支部長〔(株) サタケ 代表取締役社長〕にテーブルオーナーを担当いただき実施しました。広島地区で、同じメンバー数名で3回の交流会を行います。5つの選択肢から関心の高いテーマを選定いただき、ディスカッションのテーマが「人財確保と育成」、「DXの推進」、「技術力・開発力強化」に確定しました。

一般社団法人日本デジタルトランスフォーメーション推進協会代表理事の森戸裕一氏の進行で、1回目は集合形式で「ありがたい姿」を描き、情報交換を行いました。2回目はオンラインで、テーマに沿って課題共有などのディスカッションを行いました。3回目は集合形式で2月に開催し、課題解決に向けた今後のアクションをまとめる予定です。

中国支部では来年度以降、このサミットで検討した課題を実務者レベルのナレッジ交換など、コミュニティ活動として継続することを検討しています。

② 山陰地区若手交流企画 「イノベーション・ミーティング」

山陰地区若手を対象とし、地域での人的ネットワーク作りに加え「能動的参加によるビジネスを推進する人材の育成支援」を目的とした「イノベーション・ミーティング」。「地域の課題解決」をテーマに自分の仕事を通して、社会貢献、地域課題を考えていただく交流企画を実施しました。

ミーティングオーナーである吉田幹事〔山陰信販(株) 取締役〕より山陰地区の人口や経済動向などのお話に続き、富士通の松本シニアエバンジェリストを講師として全3回で開催しました。2回目までのディスカッションで、多くのアイデアからテーマを絞り込み、3回目のミーティングではさらに深掘りすることができました。最終ゴールを「就職による人の移動で人口の流入100%以上を目指す」に設定し、アイデア具現化のためのステップと実施プランを検討しました。

今後、コミュニティの継続やファミリー会でのプラン検討を含め、来年度以降の中国支部の企画へ活かしていければと思います。

～FUJITSUファミリー会四国支部「神山まるごと高専見学会」～ 人材育成や地域コミュニティについて考え、 一歩踏み出すきっかけに

in
Tokushima

見/学/会/概/要/

開催日時

10月24日(火)9:00～17:00

スケジュール

- 9:00 JR徳島駅前集合
- 9:10～10:00 移動
(JR徳島駅→神山まるごと高専)
※移動はすべて貸切バス
- 10:00～11:00 神山まるごと高専校舎見学
- 11:00～12:00 講演
神山まるごと高専事務局長
松坂 孝紀 氏
- 12:00～13:00 移動、昼食
- 13:00～14:30 講演
(株)エンジン代表取締役
エグゼクティブ・コーチ
竹内 和啓 氏
- 14:40～16:00 ワークショップ
- 16:10～17:00 移動
(神山まるごと高専→JR徳島駅)
- 17:00 JR徳島駅前解散

徳島駅から南西へ25キロほどの自然豊かな山の中に、2023年4月、高等専門学校(高専)が開校しました。「神山まるごと高専」と名付けられたこの高専は、名西郡神山町に位置し、民間の学校法人が運営する全寮制の学校です。大変特色のあるこの高専へ、ファミリー会四国支部の20余名が視察に行きました。

▶ 神山杉をふんだんに使った、 木の香りに包まれた校舎

車中で神山まるごと高専についての説明を聞きながら、バスで移動すること約40分。自然豊かな山々に囲まれた神山町に、同校の「ホーム」と呼ばれる寮・事務棟があります。移転した神山町立神山中学校の校舎を譲り受けたもので、一歩足を踏み入れると木の香りに包まれます。林業が盛んな地域ですが、間伐が追いつかないのが課題とのことで、校舎やテーブルなどに神山

町特産の木材がふんだんに使われています。

スタッフの丸山氏の案内で、ホームを見学させていただきました。リノベーションされたバリアフリー対応の真新しい寮ですが、ところどころ中学校の校舎の面影が残っています。現在は1年生44名(男子22名、女子22名)がこのホームで生活しています。2人部屋でもシングルベッドが2台ある広く明るい設計です。6人で1ユニットを形成し、将来は他学年と一緒に共同生活を行う予定とのことでした。生徒が3食利用する食堂は、「地産地消」を掲げ、地元で採れた野菜を中心としたメニュー。大変おいしいのが自慢だそうです。

ホームから鮎喰川という清流を渡り、5分ほど歩くと「オフィス」と呼ばれる校舎に着きます。棚田だった地形を活かした平屋の校舎には、神山町特産の神山杉約3,000本が使われているとのこと。ガラス張りの明るいオフィスの中には、講義室、ラボ、演習室、研究室などの設備があります。

▶ 「ここは小さな社会。あなたは大人」の教育

見学の後、講義室で同校事務局長の松坂孝紀氏のお話を伺いました。この学校は、起業家たちが「学校で



こんなことを習いたかった」と思うことを学べる学校を目指して設立したそうです。育てる生徒像は「モノをつくる力で、コトを起こす人」。この学校は、デザイン・エンジニアリング学科1学科の高専ですが、テクノロジーとデザインを、起業家精神や一般教養を組み合わせ、教科にとらわれず学際的に何でも学ぶ学校です。これが学校名の「まるごと」の由来になっています。例えば前期の体育の授業では、全員がスマートウォッチを付け、健康管理について学びました。

松坂氏は観衆に、「皆さんが学校時代を振り返って、一番自分自身が成長できたのはどんな時ですか」と問い、「こう質問すると多くの方が、部活や行事など、授業以外のことを挙げます。これが、私たちが『カルチャー』を大切に理由です」と続けました。授業だけでなく、寮での生活、課外活動などのカルチャーをしっかりと設計することを重要視したそうです。神山町は人口5,000人に満たない過疎の町ですが、特色ある事業に取り組んでいる非常にユニークな町で、「この町だからこそ、高専のカルチャーが育まれる」と力強く語られました。設立発表は見切り発車で、文部科学省への申請には苦労されたそうですが、昨年、日本で19年ぶりに高専の設立が認可されました。

設立にあたっては、ふるさと納税、企業版ふるさと

納税で多くの寄付があったほか、11社の民間企業（スカラーシップパートナー）から1社10億円の出資を受け、110億円規模の奨学生基金を創設しました。富士通もその1社です。基金の運用益により、民間の学校でありながら本来年間200万円かかる学費の実質無償化を実現しています。「家庭の経済状況に左右されず、世界を変える可能性を秘めた子供たちの誰もが目指せる学校にしたい」という思いから、入学金や寮費についても、世帯年収に応じて補助があります。今年度の入試では40都道府県、海外からも受験があり、倍率は9倍を超えました。

神山まるごと高専には校則はなく、服装も髪型も自由です。その代わり「ここは小さな社会。あなたは大人」という言葉をよく使い、15～16歳の生徒を大人として扱っているそうです。生徒がやりたいことに対しアドバイスをするのみで、「失敗させるのもいい経験になる」という方針から、応援し見守る姿勢を徹底しています。最後に、同校の掲げるβ Mentality（ベータ・メンタリティ）について、「ソフトウェアのテスト版のように、最初から欠点のない完成形を求めるのではなく、未完成のベータ版を次から次へと作りだし、検証して良くしていくことをビジョンにしています」と、神山まるごと高専についても、今後もアップデートしていく姿勢を強調されました。

▶「創造的過疎」で町に活気を取り戻す

その後、神山バレー・サテライト・コンプレックスへ移動。ここは縫製工場を改修したサテライトオフィスで、企業、大学、個人が契約し、定期、不定期にオフィスとして利用できるスペースです。昼食後に、株式会社エンジン 代表取締役の竹内和啓（かずひろ）氏から、神山まるごと高専と神山町のこれまでの歩みをご紹介いただきました。

神山町は、消滅可能性都市ランキングにランクインしたことがあるほど過疎化が進んだ町です。しかし神山町では過疎化の現状を受け入れ、絶対数ではなく人口構成比の健全化などを改善する「創造的過疎」を掲げています。発端は1991年の「青い目の人形」の米国への里帰りでした。これを1つのきっかけに、神山町国際交流協会が立ち上がり、ALT（小中学校の語学指導助手）制度で徳島県へ派遣される外国人向けに、神山町でホームステイを行う事業を始めました。1999年からは「アーティスト・イン・レジデンス」として、国内外のアーティストが神山町に長期間滞在しながら制作活動を行い、作品を残していつでもプログラムもスタート。現在ではクリエイターやシェフなどの移住者も増え、商店街にも活気が出てきています。また神山まるごと高専が開校

アンケート

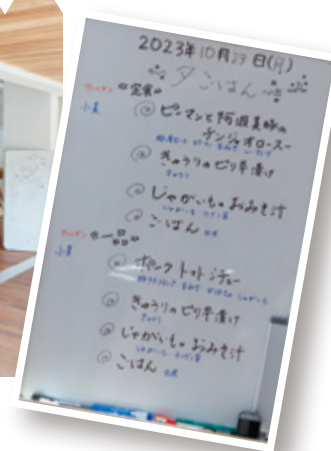
以前より興味があったところなので、絶対に参加しようと思っていた。内容も高専のほか神山バレー・サテライト・コンプレックスでのワークショップも体験でき非常に充実した内容でした。

従来の学校教育とは異なる形を知ることができる。神山まるごと高専や、神山町活性化に係るエピソードや経験談を聞くことにより、人材育成教育に活用できる。

神山町での高専設立までの流れ、そして、地域活性化など、とても参考になった。新しいことを興す際の心構えやスタンスを知ることができた。

神山町と民間企業の取り組みについて、新規ビジネスのヒント、取り組みに携わってきた方々のマイルドなど、参考になる点を多く感じた。

神山まるごと高専見学会はかなりおもしろかった。とても刺激になった。また、午後の研修も様々な業種の方と意見交換でき、おもしろかった。



し、全学年が揃う5年後には15歳から20歳の若い住民が200人増える見込みです。

徳島県では地デジ化の際、光ファイバー網を整備したため、スマホが普及する前の2005年頃から高速回線が引かれ、神山町には企業のサテライトオフィスも点在しています。2016年には、「地方創生×働き方改革に先鞭を付けたモデル」として神山町がForbes Japanが選ぶイノベティブシティの2位に選出されました。

竹内氏は、「始まりは『外国から日本へ人形を送る』という100年前の小さな行動です。このように小さな1歩が大きな成果につながる場合があります。『すき』な場所に『て』を入れて、『すてき』な場所にしてみませんか」と締め括りました。

▶ 「すてき」にするために、 ▶ やりたいことを「やったらええんちゃうん？」

ワークショップは、講師の本重真由美氏の進行で自己紹介からスタート。4人ずつのグループに分かれ、グループ内で今日感じたことを話すうち、笑顔も見えてきました。発表された感想の中には「やってみることが大事」「大きな失敗を避けるためにも小さな失敗を恐れない」と

いった意見がありました。

その後はA3の紙に絵を描きます。本重氏は「神山で感じたことを自分ごととして捉え、『て』を加えて『すてき』にするには何をすればいいか、絵にしてみましよう。絵心は気にせず、自分の頭の中を描きだして、他の人とシェアしましょう」と説明。最初は白い紙を前に戸惑っていた参加者もいましたが、カラフルな絵があちこちで描かれました。その後のグループ内発表の際には、皆さんキラキラとした明るい表情で話していたのが印象的でした。数名は全員に対して発表し、参加者全員から「やったらええんちゃうん？」と声を掛けられ勇気ももらったようでした。

秋の晴天の中、見学や講演、ワークショップと充実した視察会になりました。また参加者同士、名刺交換をしたり情報交換をしたりする姿も見られ、親交を深めることもできたのではないのでしょうか。ファミリー会では今後も様々な研修や見学会を企画する予定ですので、ぜひ皆様奮ってご参加ください。

Red Crowned Crane



■ Profile

呼称：タンチョウ (和名)

Red Crowned Crane (英名)

学名：Grus japonensis

分類：ツル目 ツル科

サイズ：全長 140cm、翼開長 240cm ※数値は目安

食物：雑食 (穀物、種子、草、小魚、昆虫など)

生息地：国内では北海道東部の釧路湿原を中心に分布

国外ではロシア・中国・朝鮮半島

レッドリストの評価*：VU (危急)

人と共存しながら自然回帰へ向かう「湿原の神」

真っ白な湿原にふわりと舞い降りる美しい鳥。釧路湿原のシンボル、タンチョウ(丹頂)は翼を広げると約2.4mにもなる国内最大級の野鳥です。その昔アイヌの人々は、この神々しい鳥を畏怖の念を込めて「サルルンカムイ(湿原の神)」と呼び、崇めていました。

タンチョウは、明治時代の乱獲と湿原の開発により一時絶滅したと考えられていましたが、大正時代に湿原の最奥部で十数羽が再発見され、それ以降、地元の人々による地道な給餌が行われた結果、次第に個体数が増加。1952年には国の特別天然記念物に指定され、行政による保護事業やNPOなどの保護活動も功を奏して、現在は約1,800羽まで回復しています。

個体数が回復したことは喜ばしい傾向ですが、依然として湿原の面積は減り続け、周辺の森林も伐採されています。森がなくなると土地の保水力が減り、冬季は川が凍って餌を採ることができないため、人からの給餌に依存し生き延びている状況です。また、給餌場への集中は鳥インフルエンザなどの伝染病がまん延するリスクも高まります。そのため、自然に近い状態での安定した生存と生息地の分散を目指して、自然採食地の整備、給餌量の調整などの取り組みが進められています。

タンチョウと人との距離は、確実に近づいています。保護という一方的な関係性ではなく、共に生きていくことにつながる新たな方策が求められています。

*IUCN (国際自然保護連合) レッドリストでは生物種を9つの基準で分類しています。「未評価」、「DD (データ不足)」、「LC (低懸念)」、「NT (準絶滅危惧)」、「VU (危急)」、「EN (危機)」、「CR (深刻な危機)」、「EW (野生絶滅)」、「EX (絶滅)」

FAMILY 通巻412号 2024年1月20日発行 (年4回発行)

編集責任者 FAMILY編集委員会 山宿 信也

発行 FUJITSUファミリー会

〒212-0014 神奈川県川崎市幸区大宮町1-5 JR川崎タワー
富士通(株)内

Copyright 2024 FUJITSUファミリー会 [禁無断転載]

*本誌記事中の各会社名、各種製品名等は、各社の商標または登録商標です。

*本文にある専門家による情報・意見は、必ずしも富士通・編集委員会の見解を反映したものではありません。